無痛分娩に関する麻酔説明および承諾書

1. 目的、内容及び結果

硬膜外麻酔、脊髄くも膜下麻酔、もしくは笑気を用いた無痛分娩

・上記の鎮痛法を単独または併用してお産による痛みの緩和を行います。
・硬膜外麻酔:脊髄神経を包んでいる硬膜の外側に存在する「硬膜外腔」に細い管(カテーテル)を留置して、
　薬液を注入することにより痛みを緩和する方法です。胸腹部の手術後にも用いられる鎮痛処置とおなじです 。
・脊髄くも膜下麻酔:脊髄神経を包む脳脊髄液がある「くも膜下腔」に細い針を穿刺して、
　少量の薬液を注入することにより痛みを緩和する方法です。腰椎麻酔(脊椎麻酔)とおなじ処置です。

・注意点など
　・鎮痛処置を行っても、全く痛みがなくなるわけではありません。
　・分娩の進行により痛みの程度や場所が変化していきます。
　・効果が不十分な場合にはカテーテルの入れ替えなど追加処置を必要とする場合があります。
　・計画分娩では、陣痛の出現前にカテーテルの留置を行い、陣痛が出現してから薬液の投与を行います。
　・分娩進行が速い場合には鎮痛効果が間に合わない可能性があります。
　・分娩終了後は、原則として翌日までにカテーテルを抜去します。
　・分娩方法(計画分娩・自然分娩)や条件(初産・経産など)の違いにより分娩時間が大きく異なる場合があり ます。
　・医学的な理由などで無痛分娩を変更・中止する場合があります。
　・笑気を用いた場合には、ふらつきや嘔気が出ることがあります。

2. 処置の手順など

・準備
　・採血を行い、処置が可能か判断する場合があります。
　・処置中の嘔吐・誤嚥予防や急に帝王切開になる場合に備えて、分娩進行中は絶食の必要があります。
　　・お茶やスポーツドリンクなどの水分は摂取できます。
　・処置前に点滴をとり、血圧や脈拍を定期的に測定します。
・麻酔のための処置
　・横向きあるいは座った状態で背中を丸めた姿勢で消毒、局所麻酔を行います。
　・その後専用の針を穿刺してカテーテルを留置します。
　・硬膜外麻酔ではカテーテルを挿入して薬液を投与します。
　・脊髄くも膜下麻酔では針を刺入して薬液を投与します。
・穿刺処置中は、体動により神経損傷や予期せぬ硬膜穿刺がおこる可能性があります。
　・陣痛の痛みやその他の痛みが生じたときは、体を動かさずに麻酔科医・スタッフに知らせてください。

3. 予想される危険性および合併症

・比較的よく起こりやすい症状(通常は無痛分娩処置の終了によって自然に回復します)
　・かゆみ、体温上昇(発熱)、背中の痛み(おもに挿入部痛)
　・血圧の低下
　　⇒座る・立つ時にふらつき・意識消失の可能性
　・局所麻酔薬などによる神経障害(下肢のしびれや筋力低下)
　　⇒歩行時に転倒の危険性
　・尿閉(自力で排尿できない状態)
　　⇒定期的に導尿が必要となることがあります
　・胎児心拍異常(急速なお産の痛み緩和時の子宮筋過収縮が原因)
　　⇒分娩時間の延長、吸引・鉗子分娩率の上昇の可能性があります
・時々起こる症状
　・硬膜穿刺後頭痛(頑固な頭痛、めまい、悪心など)
　・局所麻酔薬中毒(アレルギーや中毒症状(耳鳴り、口唇のしびれ、舌の違和感、けいれん、不整脈)
　・穿刺部の皮膚・皮下の感染

・ごくまれに起こりうる症状
　・硬膜外血腫による下肢の麻痺（10～15万人に1人）
　・硬膜外膿瘍（非常にまれ）
　・全脊髄くも膜下麻酔(意識消失、呼吸停止)（非常にまれ）
　・カテーテル切断（非常にまれ）

4. 無痛分娩を実施できない場合

・血が止まりにくい(血小板減少、血液凝固異常、内服薬の影響)　⇒血腫による神経障害
・感染の疑い(発熱、炎症反応上昇)　⇒硬膜外腔・くも膜下腔への感染の波及
・脊椎・脊髄疾患、脊椎の手術後　⇒穿刺困難・効果不十分・神経損傷
・早産、低出生体重など胎児の未熟性　⇒吸引・圧出分娩時の新生児の外傷
・夜間・休日、急患対応時など　⇒スタッフ不足による施行困難

5. 合併症を生じた場合の処置について

・硬膜穿刺後頭痛に関しては、基本的には安静と水分摂取で経過をみますが、症状が重い場合は硬膜外腔に生理食塩水や自家血（自分の血液）を注入する処置を行います。
・硬膜外膿瘍や硬膜外血腫発生時には緊急手術が必要となることがあります。
・局所麻酔薬によるアレルギーや中毒症状、全脊椎麻酔による症状などが生じた場合は必要に合わせて気道確保や投薬による治療を行います。

6. 費用

・自費診療になり、費用は概算で税込み15万円です。
外来で3万円（術前検査・麻酔科外来代として）、無痛分娩開始後に12万円の請求となります。
※3万円は術前検査・麻酔科外来診察に対する料金のため、麻酔科外来受診後に無痛分娩を行わない場合（適応外と判明、希望されない、帝王切開に変更、など無痛分娩が実施できなかった場合）でも返金できません。

7. その他

・チーム医療を行っているため、担当麻酔科医師は説明医師とは異なる場合があります。
・麻酔方法のデータを、日本麻酔科学会が行っている偶発症調査などのデータとして、個人情報には十分に留意し、使用させていただきます。
・麻酔記録や分娩経過を、個人情報には十分に留意しつつ、医学の向上目的に学術集会や学術誌へ報告さ せていただくことがあります。
・不安に思われること、疑問に感じることがありましたら遠慮なくご質問ください。

説明医師　麻酔科＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

東邦大学医療センター大森病院病院長殿

麻酔承諾書

私は、麻酔方法およびその合併症・必要な処置およびその合併症の説明を受けました。内容を理解して麻酔を受けることを承諾いたします。状況に応じて担当医が適切と判断した場合、上記以外の診療行為を実施することに同意します。

承諾書記入日

本人：（署名）

【↓以下は、未成年あるいは自署できない場合に記入してください】

代理人：（署名）

代理人の続柄：配偶者・父・母・子・兄弟姉妹・その他（　　）